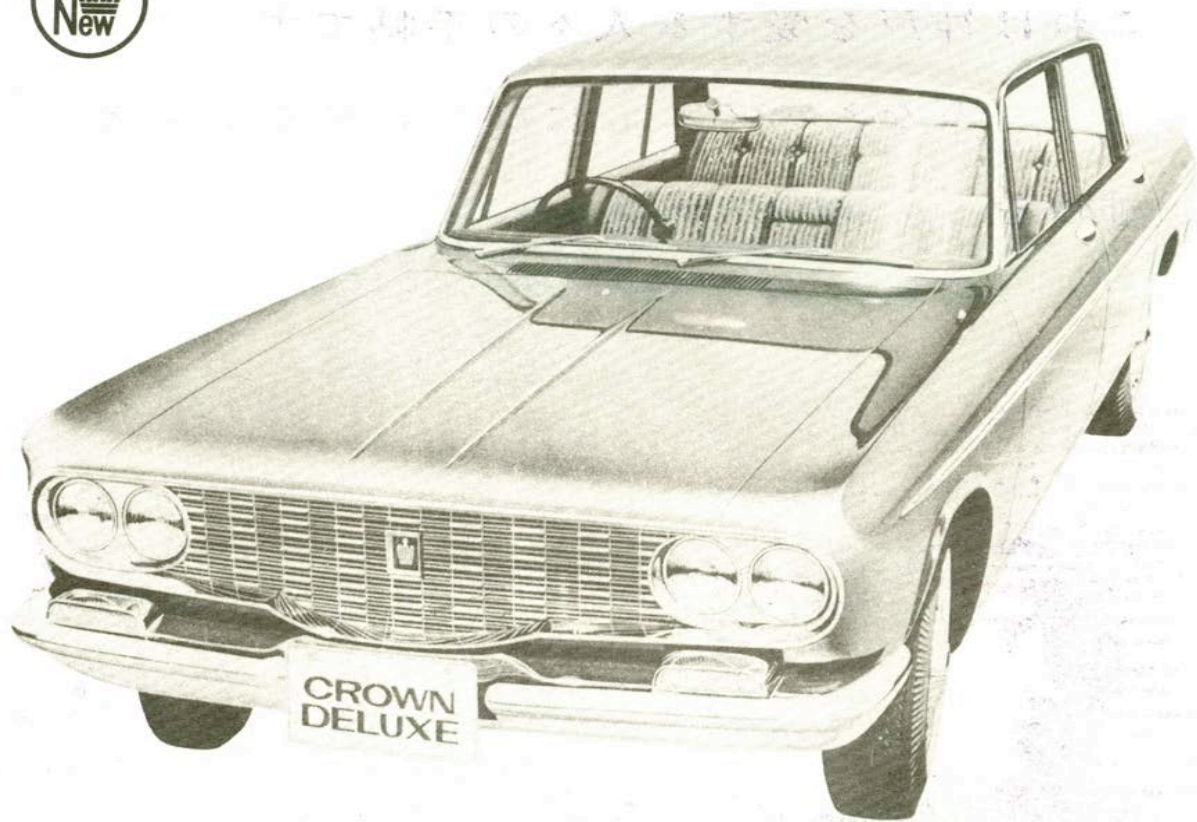


神戸っ子

[illegible]

monthly magazine kobekko october 1962 no, 19

昭和37年10月1日発行（毎月1回1日発行）



## トヨペット クラウン デラックス

兵庫トヨタ自動車株式会社

本社 神戸市長田区北町215・神戸⑥5051

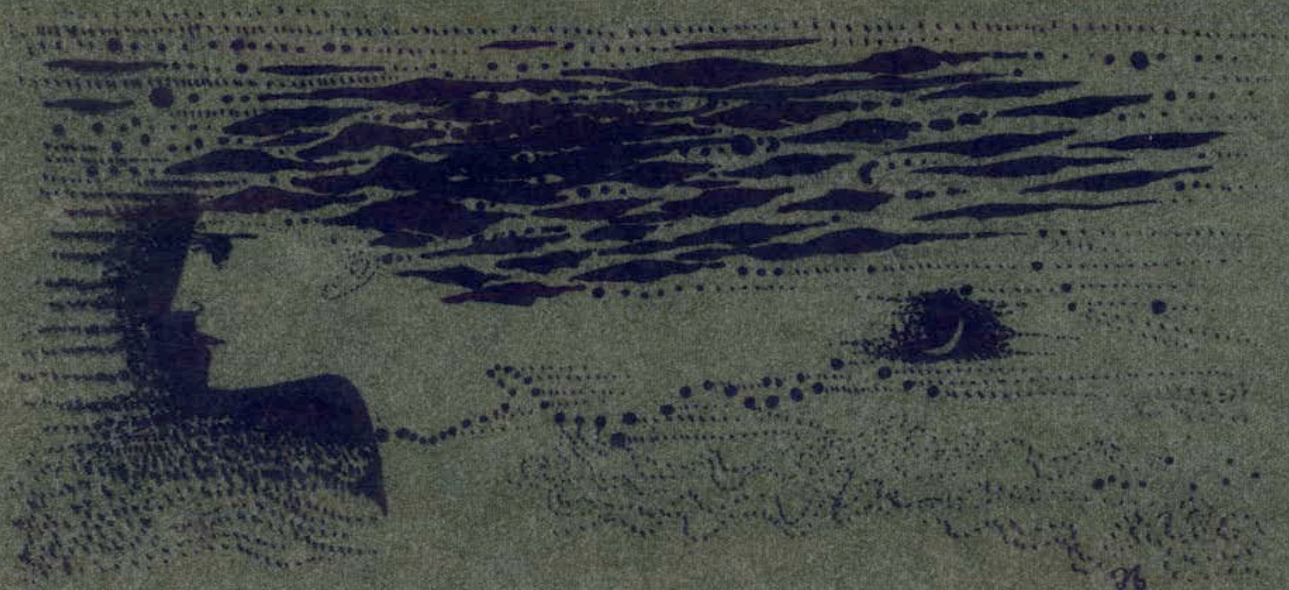


これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です





# 神戸と女性

近衛真里（宝塚花組）六甲山上にて…

均整のとれたスタイルで踊るモダン・ダンスには定評のある近衛さんは、宝塚スケート・チームにあって花形的存在です。舞台生活九年のキャリアをもつ彼女は、最近、歌や芝居にも意欲をみせ明石・寿美なきあとの男役スターとして大きな期待がよせられています。

（カメラ・杉尾友士郎）



# SONY®

## マイクテレビ

世界最初のエビタキシャル・トランジスタ使用

### トランジスタが

### テレビを変えた



オールトランジスタ24石 5-303型 ¥65,000

- 世界一小さく世界一軽い・電話と同じ大きさ
- 自動車の中でも、どこでも、ごらんになれる
- キメの細かい美術印刷のようなすぐれた画質
- 電源は専用電池・電灯線・自動車のバッテリーすべてOKで消費電力は大型テレビの1/10

ソニー商事株式会社大阪支店  
神戸ソニー販売株式会社

大阪市西区立売堀南通二丁目七〇  
TEL 541 9641  
神戸市生田区中山手通二丁目二〇  
TEL 221 8606

カクログ屋





## 目 次

- 1 神戸と女性／PHOTO・近衛真理
- 3 連載随想第3回／瀬戸内海のお賊・白川渥
- 9 れんさい随想／神戸のこと手当たり次第  
淀川長治
- 12 連載・問わず語り／⑦・時代小説と男性  
司馬遼太郎
- 17 私の好きなスター／花柳芳恵似子
- 18 神戸だからえがく夢No.11／藤本義一
- 20 野のはな対談①／すてきなお嬢さんこんにちわ  
岡部伊都子
- 24 座談会／里親制度に愛の手を・ゲスト 松前敏彦
- 28 結婚シーズンを迎えて／福富芳美
- 30 WEDDING SHOPPING
- 35 座談会／神戸港はベリーグッド！
- 40 神戸うまいもの地図・ランチタイム
- 42 神戸うまいもん巡礼／No.3・赤尾兜子
- 44 BONSIOR MADAME／コトブキ
- 47 対談／アイジョージ・鴨居羊子
- 48 表紙のことば／小磯良平
- 49 びんくこーな（T）
- 52 KOBEEKO SHOPPING GUIDE
- 57 ショート・ショート⑦ざんげ話／陳舜臣
- 60 花時計・編集後記
- 表紙／小磯良平・カメラ／杉尾友士郎・米田定蔵  
デザイン／橘昭三・コピー／五十嵐恭子

# 瀬戸内海の 海賊

白川

渥



柴田錬三郎とはゴルフ友達である。久しぶりに来神した柴田を迎えて、垂水ゴルフ場でクラブを振ったあと、キングス・アームスで夕食を摂りながらの対談――

「柴田君、神戸に来たのは初めて？」

「いや、神戸は馴染のある町なんだよ。私の兄が、柴田剣太郎とい  
ってね。布引のあたりに貯水池があるだろう、あの近くにいてね。  
私が少年の頃、時どき来たことがあるんです。昭和十年頃だったな  
それからは全然ご無沙汰で、こんど始めてだよ。だから久し振りで  
戦後始めてと云うことになるな」

「出身が岡山でしょう。案外、縁遠いんだな」

「僕は京都にはしょっちゅう来るんだが、不思議に神戸にまで来ないな。明日も京都に仕事に行くんだよ。中村錦之助君が、女房の手料理を食べに来てくれといつて来てね。少し早く神戸を発つ心算なんです。だけど、神戸はいいね。ゴルフ場も近いし、君なんか、東京へきたいとは思わんだろう」

「ところで、あんた、慶応の支那文学だったんだね。なかなか大作のようだが、文章の格調が高くて、きちっとしているのに、いつも敬服しているんだ。支那文学ときいてなるほどと思ったね。文章の骨格にどこか漢文脈がある」

「ぼくは奥野信太郎門下だ」

「ぼくはいま『毎日新聞』に『善忘十話』を書いていて、諸橋轍次博士の教えを受けたんだ。東京高師でね」

「あんたが諸橋門下とは知らなんだ。諸橋博士の漢和大辞典ね、たいたいものですよ」

「諸橋博士は当時、学生のあいだにも人気があったな。面白い先生ですよ、『善忘十話』に愉快な逸話を書いていられる——講道館の嘉納治五郎氏を訪ねて、所用をすませて帰える時、帽子を忘れて、嘉納邸に取っかえしたところ、嘉納治五郎先生が笑って、『君、帽子は手にもっているじゃないか』諸橋先生、自分で手に持っていたんだナーショウベンハウエルの『笑い哲学』じゃないが、あの十話は『物忘れの哲学』だナ」

「そう言うゴーケツ先生はだんだんいなくなっただね」

「ところで柴田君は時代小説を自由自在に書いているが、どうして書いているの」

「江戸時代のことを書くこうと思うと、三年間みっちり江戸の歴史や風俗の勉強するんだ。すると、その頃の江戸の街が、脳裏に浮んで来るようになる。街のこの道には橋があつて、あそこには四ッ辻、この河には土手があるというのが判るようになる。舞台の設定が出来て、庶民の生活がいきいきと描ける。三年やれば、誰にだって書けますよ」

「僕はね、一度、瀬戸内海のお賊ものを書きたいと思っているんだ



が……」

「それは面白い。ぜひお書きになるといいですよ、海賊といっても実際には悪いものではないんですよ。特に瀬戸内海、海賊は」

「そうなんだ。あの頃、海賊というのは、海の支配者というような意味なんですよ。中央政權から見れば海は治外法権でね、つまり、中央政權中心の歴史から見れば、税金を納めない「賊」徒ということになる。ただ中央から独立して、制海権をもっていた水軍を海賊といったにすぎない。事実、南朝五十七年を支えたものは、海賊だと言ってもいい。海のルートによって、足利政權を手古ずらせたんだ。いまでも瀬戸内の島々には、海賊の館が残っているところがあるよ。汐の匂いのする雄大なロマンを書いてみたいね」

「瀬戸内海、そういう水軍の間では航海術が発達したらしいね。ちよんどギリシャの多島海のように」

「この海の支配者達はまたいろいろな仕事をやっているでしょう。」

秀吉の朝鮮征伐の時の水軍もそうだし、江戸時代には、江戸の度々の飢饉や大火を、瀬戸内海の船師たちが、奥洲酒田の米を瀬戸内海を経由して救っているんだ。とにかく、この神戸港なんぞも、昔大輪田の泊と言われた頃は、その海の支配者たちの基地だった訳だ」

「そういうものが今日の神戸の海運業者の先蹤とも言えるね」

「とにかく、その頃の海の人間には不思議なバイタリテイがあるね。海国日本にもイギリス風、海賊文学が欲しいよ。ところで、これから京都へは何の仕事で？」

「東映で映画の脚本を頼まれてね、少し変わった映画をねらっているんだ。もちろん、時代物なんだが、先ずトップシーンに、東海道を走る特急こだまを出して、そこからチャンバラの時代にはいろうと言う構成なんだが。……」

「柴田文学らしいダンディな趣向だ。なかなか洒落れてるよ」



神戸宝石は伝統に輝く宝石店です。宝石を磨き続けて二十数年…素晴らしい技術が生んだその宝石は、皇后様高松宮様に、ご納品した栄誉と実績に輝やいています。

その神戸宝石がトアロードに最適なサービスショップを開きました。ミナトコウベの秋の御散策に、宝石のことなら何でも安心してご相談できる神戸宝石トアロード店に、どうぞお立寄り下さい。

直輸入 宝石・貴金属・ゴルフカップ

タニジ

**神戸宝石** トアロード店

トアロード国鉄高架北100米東角/10時～7時(月曜休)/TEL③2397



オルガンが  
お安くなりました

## ヤマハオルガン

●世界一の生産設備完成

●通産大臣賞に輝くヤマハの技術

“よりよい製品をより安く”をモットーに日夜努力を重ねております。このたびのオルガン値下げもそのひとつです。この機会にどうぞヤマハオルガンをお求め下さい。



20B-M

61鍵 総2列 笛  
送風用モーター付

旧価格 ￥31,000

新定価 ￥28,000

神戸もとまち



**日本楽器**

元町通2丁目 TEL ③1631-2

世界の人々に  
愛される  
キタムラパール

**北村パール**

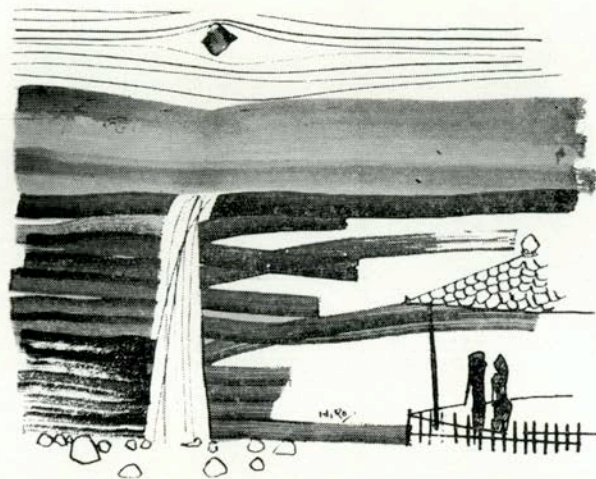
北村真珠株式会社

神戸/元町2・東京/スキヤ横ビルター  
TEL ③ 0672-5711 8032

れんさい随想／③

# 神戸のこと 手当り次第

淀川長治  
え・松本宏



秋になると、今でも布引のめん滝の茶店のラムネが恋しくなる。谷まったそのうすぐらい茶店から、はるか高く青空を眺めると目に痛い秋色の美しさ。峰から峰に走る雲の白さが滝の流れにかすかに映えて、そのひやりと肌さす冷気が滝のしぶきをふくんで、ここが電車道から歩いて十分などとは神戸は天国だ。をん滝はからりと明るくその茶店のコーヒー・カップが西洋人ごのみをならったかの上品で清潔で美しかった。

晴れた日曜日には……ツエンチクロスに行こう。布引の滝のけい流にそってさらに奥にその川の流れにあちこちと二十の飛び石の渡しがあつた。ツウエンティ・クロスとは呼ばないでツエンチクロスなどと云うところが嬉しかった。この布引の滝で売っていた黒い西瓜切り人形は今はどうなったのであらう。したんまがいの黒ぬりの木を巧みに彫って丸坊主の人形が坐った前にまな板がありその上の



西瓜を人形が手にしたホーチョーこれが右はしの軸木を手でくるくると廻すたびにその人形は首を振りその手はヒョコリヒョコリと西瓜を切る。その西瓜の割れ目は真赤に塗られ人形の口をひらくその歯が真白という、その黒赤白のデザインがすばらしい。この首振り黒坊主人形ははたして今もあるのだろうか。

秋は食い気も出て、思えば生田筋の「たまひろ」三の宮の「あなもん亭」それから柳原から元町へ移った「青辰」(あをたつ)はどうなったのであろう。「青辰」は種が切れるとおひるすぎでもう店を閉めると聞いた。それも名店気質でよからうが、やっぱり夜の客も大切にするのがよい。柳原に「青辰」があったころは、あの箱ずしの上のタマゴと、それから白いめしにまじったきくらげの味が忘れられない。明石から高砂にかけてのあなご、東京の人があなごを馬鹿にしているのはこれを知らぬからであらう。

「ニュートン」「サノヘ」みんな懐しく生田筋で「エバンタイ」をやっていただけに私もお客のサーヴィスに店に出た思い出があって、岡田茉莉子のお父さんの時彦さんが、さっと覗いてあれとこれとそれと云いながらネクタイ五本を一度に買ってスーツと行っちゃう時なんかむやみと感心したものだ。そのネクタイがフランス製の今で申せば一本三千円級のものだっただけにその買いっぷりに見とれ見惚れたのであった。

きれいな思い出もあるが勇敢な思い出も糸の尾をひいて懐しい。三中に柳原から歩いて通った私はいつも二中の下を通る。今はすっかりあとかたもないが、昔、そこらあたりに部落民というのがあって「あそこを通ったらあかんで」と家のものによく云われてきた。目医者が相手が部落民ということで断ったのもこの目で見ることがある。私は「アホくさ」と思った。腹が立って仕方がなかった。その部落の人たちの家のはずれに靴屋があった。私はわざとそこでも靴の底をなしてもらった。その靴屋の親父がいかに人が良きそ



うでこれがまた気に入った。今はそんなこともなくなったが、私の中学時代まではまだ「あそこの嫁はんはアレやでえ」とかげぐちをきく。とうとう腹の虫がをさまらなくなった私はある日ひそかに石ケンと手ぬぐいを学校の鞆の中にかくし、学校のかえり道にその人たちのたてこんだ家の奥の露地のつき当りの、その人たちが専門の銭湯に行ったことがある。今で云えば二十円が普通なら、それが十円つまり世間の半がくの値段であって、ガラス戸を押し開けて這入るともう人がいっぱい小さな湯船は大人子供で海水浴の茶店風呂さながらだった。妙な中学生が学生服をぬいで這入りこんできたのを別に誰一人いぶかる者としてなく、子供はキヤッキヤッと騒ぎ大人は汚い手ぬぐいでにごった湯船の湯の中で顔も頭もずると洗いたいのまま私は部落民と同じ湯の中にいる。あの連中の肌の汗が湯の中でとけてこの私の肌にもしみこんでゆく。いいじゃないか、おんなじ「私たち」。さて家にかえり家人にけろりとして家の湯にその夜あらためて知らん顔で這入ったのはもちろんである。

×

×

私の父は山本通りに五けんほど貸し家を持っていて、それがみんな外人向きの洋式でアメリカ人の借り手、イギリス人の借り手、それにインド人もあつてそのインド人が水洗便所が嫌いでもうして日本式にしてくれときかなかった。どうしてと聞くと水洗だとなあジャーととび出す水洗のしづきがちよつともおいどにふれるとも一度からだ全体シャワーをあげねば神さまに嫌やがられるというお祈りの時間に家賃（やちん）をとりに行くと手を横にふりながら待ってくれと合図して、ベッドの下において坐って両手を上げ下げしながら頭をカーペットにすりつけてアラアの神かなにかを神妙に祈っていたのも思い出した。

神戸は好きだ。人間が生きている。神戸は私の誇りである。東京に何十年住みついても私は……神戸が……大好きだ。

（映画評論家）